



シギチドリが来る干潟は 自然の「原点」だ。

ハマシギとオオソリハシギの群れ(徳津平)

ヤマトオサカニ
撮った
チウワクシギ

オオソリハシギ

ハマシギ

アオアシシギ

タイゼン

タイゼン

ホワクシギ



小学校の頃からシギチドリを見ていますが、
理の志で、いふふと志を定めて、鳥の
動きがいつも自然の現象を感じていいます。

子供の頃から、
の自然観察教育が大切だと感じて
しています。とくに野鳥観察は、
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係

東北の海沿いの干潟にシギチドリが飛来すると、
はうの音を聞きながら、鳥の動きを観察する。
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係

北海道(全道)で6年、根拠地(根拠地)として
観察者の観察対象(観察対象)を観察する。
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係
● 観察者(観察者)と観察対象(観察対象)との関係

干潟は、こまかい泥と豊かな有機物の働きで
海水をきれいにし、いわば天然の浄水場だ。
有機物の合成をする植物やバクテリア、アサリ・
ハマグリに代表される二枚貝や巻貝などの貝
類、ゴカイ類、カニ類などなど、無数の生物たち
が互いに深くかかわり合って生活している。
そしてこの生物が、トリたちにとって魅力的なご
ちそうになる。とくに、夏はアラスカやシベリアで
繁殖のために北上し、冬はフィリピンをはじめ
東南アジアやニュージーランドまで南下するシギ・
チドリにとって、日本の干潟は長い旅のつばさを
休め、豊富なエサでたっぷり栄養を補給する
中継地である。

かつて、大きな湾の奥や河口に発達してい
た干潟の多くが、港や工業用地や宅地として
次々に埋め立てられ、姿を消していった。わ
ずかに残された干潟も、楽観できない。当然、
シギ・チドリは生命をおびやかされている――。

写真の4人は、シギ・チドリを愛するがゆえに干
潟を愛し、飛来する数をカウントして自然環境の
変化を見つめ、データをまとめている多くのア
マチュア観察者の代表として紹介させていた
だいた。「シギ・チドリが好きだから」干潟に通いつ
めるボランティアたちである。何年にもわたる彼
らのデータは、ときに種類や群れの減少を、とき
に干潟の滞在期間の短縮や分布状態の片寄
りを報告した。それは、「トリだけでなく他の生
物にも何らかのかたちで影響がある」ことを示
し、「干潟をなくすことは生物を殺し、きれいな
海を失うことだ」と訴えている。

全国で、干潟をまもろうという声が根強い。
これは、単に干潟のトリや特定の生物を守ること
ではなく、自然そのものを守るとい、原点の
運動である。そしてそれは、この4人のような、
地道な活動によって支えられている。4人は言
う、「いちど、干潟に来てみてください――」。

日本の干潟のシギ・チドリはいま、50種類、
約46,000羽(昨年度の全国507ヵ所、1,145名によるシギ・チドリ
類全国一斉調査(日本野鳥の会より))である。



財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

この愛鳥キャンペーン広告は、(財)日本鳥類保護連盟の指導と
(財)日本野鳥の会の取材協力を得て、サントリー株式会社がシ
ンクとして制作するものです。野鳥保護を通じて、環境と自然を
守ることの大切さを知り、美しい地球を未来へ引きつぎたいと
精神風土づくりを旨とします。どうぞ皆さまのあたたいご支援を。